

2019 年 10 月 6 日（日）「祈りの戦い ～ゲツセマネにて～」

マタイ 26:36-46

36 それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていなさい。」

37 それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」39 それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのうちに、なさってください。」

40 それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかったのか。41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」42 イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」

43 イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかったのである。44 イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。45 それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。46 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

【序論】

今日の箇所は一つの重要な「祈り」を扱っています。「ゲツセマネの祈り」と言われる、主イエスが十字架に架けられる前夜、身悶えしながら父なる神様に祈ったという場面です。このところを描いた聖画も多く残されていますが、どちらかと言えば、静かに父なる神様と向き合うイエス様という印象のものが多いように思います。しかし、中には地に倒れ伏し、壮絶な祈りをささげるイエス様の姿を描いたものもある。どなたの絵かは知りませんが、一点紹介させていただきます。汗だくになり、泥にまみれ、地面を引っ掻きながら、血を滲ませて祈るイエス様の姿



が見事に描かれています。実際、この時の祈りは、およそ静かなものではなかったでしょう。主イエスの号泣、叫び、唸り声が聞こえてくるような、壮絶な「戦いの祈り」です。聖書には多くの祈りが残されていますが、これほど激しい命がけの祈りは二つとありません。この場面を少しでもリアルに再現するのが、説教者の務めです。画家は視覚的描写によって、説教者は言葉によって。主は何故そんなにも苦しまれたのか。

【本論】

本論 1. 祈りの援護を求める

それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行って祈っている間、ここにすわっていなさい。」(26:36)

最後の晩餐は、一人の弟子の裏切りと、他の弟子たちも主を見捨てて逃げるという衝撃的な宣告をもって終わりました。どことなく気まずい雰囲気の中、一行は外に出たことでしょう。一つの覚悟を決めた空気がそこに流れていたと思われます。

「ゲツセマネ」という場所は、オリーブ山の西の麓にあった園で、意味としては「油搾り」であることから、オリーブの^{あつさく}搾場であったことが想像できます。オリーブの木が多く生えていて、搾機が置いてあったのかもしれませんが。主イエスはいつもそこを祈りの場所としていたようです(「いつもの場所に着いたとき」ルカ 22:40)。敢えていつもの場所に行くとは何を意味するか。そこはイスカリオテのユダに知られている場所であり、間違いなく彼が敵を誘導して来ると思われます。つまり、主イエスは別の場所を選んで逃げることもできたのですが、そうしなかったということなのです。主は8人の弟子を園の入口付近(?)に残し、3人だけ連れて、少し奥まった所へ行かれました。

それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。(26:37)

ここで選ばれた3人は、大事な場面で度々連れて行かれる「三羽鳥」です(4:18-22、17:1-8、20:20-28、マルコ 5:37)。十二弟子の中でもいつしか代表者のような顔になってきていたのでしょう。この3人の間でも隠れた権力争いがあったようです。そして、彼らはそれぞれに主イエスに命をささげるという意志を表していました。篤い思いで主に従っていたことは確かだったと思われます。主はこの3人に何を求めておられたのか。まず、これから始まる壮絶な祈りを見られても構わないほどに信頼の置ける3人であったことでしょう。そして、主は彼らに祈りの援護を求めていたはずです。一人では立ち向かえないほどの重圧が主イエスに襲いかかっていた。その重さが少しでも和ら

げること願っておられたのではないか。そして、彼らは主イエスの祈りの苦闘をその目に焼きつけ、どこまでも父なる神様に従い抜かれたことの証人とならなくてはなりませんでした。

主は「悲しみもだえ始められた」。この時の主イエスの心境は如何にして説明できるでしょうか。実のところ、私たちには分かりきることができないのです。それでも、考えなくてはなりません。主イエスはこれからご自分に降りかかる試練の前に、ガタガタと震え、悶絶するほどの苦しみで地をのたうち回りました。

私は大学生の頃、寮生活をしていましたが、同じフロアに韓国人の学生が何人かいました。中には激しい祈りをささげる人もいて、こんなことがあったのを覚えています。私が寮の祈祷室にこもっていたとき、隣の祈祷室に誰かが入ったのが分かりました。それから始まった祈りの凄まじさ。備え付けの台をガンガンと叩き、叫び、泣く声に圧倒されました。言葉は分かりませんでしたが、私がささげたこともないような祈りでした。

この時の主イエスの祈りはどういう思いに基づくものか。第一に、主は死を恐れていました。人が死ぬとき、多くの人は恐れを抱くでしょう。しかし、その恐れは漠然としたものであることが多いかもしれません。この世から自分の存在がなくなることが怖いのでしょうか。あるいは、本能的に死後の世界のことを恐れているのか。自分の全生涯が神の御前にさらけ出されることを知っているのでしょうか。主イエスは一人の人間として死のうとしておられる。しかし、主イエスは本来、死とは無縁の神の子なのです。命の源なるお方が死と関わりをもとうとしている。その意味を主イエスは澄み切った目で見ておられたのです。死が罪の結果人類にもたらされたのであれば、主イエスもまた罪と関わりをもつ者として死ぬのです。神の子にしか分からない恐怖がある。

第二に、主イエスのご自分の「死」が、全人類／全歴史の罪からくるものであることを知っておられました。私たちには想像もできないことですが、測り知れない罪が一人の人の肩にドツとのしかかるのです。何か、真っ黒に汚れたものが主イエスの全身にこびり付いていくかのような。聖なる方が「穢^{けが}れ」を身に負っていく。

第三に、実際の集団リンチと侮辱、肉が削げるほどの鞭打ち、発狂するほどの苦しみをもたらす十字架刑を経験していく。この極度の痛みと苦しみを、もちろん恐れておられたことでしょう。

そして、第四に父なる神様に棄てられること。永遠より交わりをもち続けてきた、父と子の愛の関係が切られようとしているのです。どんなに苦しくとも、主イエスは父なる神様に祈るとき、常に平安を得てこられました。しかし、父との関係が断たれる。神の子にとってこれ以上ない悲しみであったはずです。これも私たちにはほんの一部さえも分からないことなのです。

本論 2. 誘惑との戦い

それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」(26:39)

ここでの主イエスの祈りの内容に注目しましょう。「この杯」とは、十字架の苦しみを通して全人類の罪の刑罰の代償となられること。罪なきお方が多くの人の代わりに罪に定められる。「救いの方法はそれしかないのですか？」という問いです。父なる神様には確かに救いのご計画がある。しかし、もっと楽な方法があってもよいのではないか。神の知恵によれば、他の道を提示することもきっとできるはずだ。主イエスは父なる神様の「意志の限界」を問うておられるのです。「どこまでなら私の祈りを聞き入れてくださいますか?」「どこからが受け入れられないことなのですか?」

主イエスはこれまでに何度も弟子たちに十字架を予告してこられました。しかし、実際にその場面が目前に迫ってきたとき、主はとてつもない恐怖に襲われたのです。この「第一の祈り」では、父なる神様に「意志の変更」を願い求めています。それでも最後には「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」という従順を表しておられます。祈りとは「神の御旨に参与すること」なのです。②主イエスも「こうであってほしい」という願いをもちながら、最終的には神の最善だけが成ることを求めておられる。

私たちの祈りの内容はどうでしょうか。私たちは多くの「願い」を神に打ち明けます。それらはきっと受け留めていただいているでしょう。しかし、その上で私たちが神の最善の御旨が成るようにと祈ることが重要なのです。「私の願うようにではなく、御心のままに」と。

それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかったのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」(26:40-41)

主は祈るのに疲れを覚え、弟子たちの援護を求められました。「誘惑」という言葉が出てくるように、これは悪魔の誘惑との戦いだったのです。悪魔はどのように主イエスを誘惑していたか。それは、まさしく「十字架を経ることなく神の国を打ち立てよう」という呼びかけでした。これは、「荒野の誘惑」の内容とピタリと一致する。

①「神の子なら石をパンに変えてみよ。父なる神様に頼らずとも、お前には力ある業を行なえるはずだ。」

②「神殿から飛び降りて、人々をあっと言わせてみよ。そして、人心を掴み取れ。」

③「俺に魂を売って、一緒にこの世界を支配しよう。」

これらの誘惑は、総括して、「父の御旨」とは異なる方法によって、つまり十字架なしで（御子の苦しみ抜きに）神の国を打ち立てようという誘いでした。この誘惑はしつこく主イエスに付きまとう。主イエスはあくまでも父なる神様の御旨に従い抜こうと決意をしておられましたが、その決意に自分を合わせていくために祈りが必要だったのです。そして、弟子たちの祈りの援護射撃を必要としておられた。ところが、いざ弟子たちを見に来てみると、3人は眠り込んでいたというのです。悪魔は彼らを祈れなくさせていたのでしょう。イエスに孤独な戦いを強いるため、弟子たちを骨抜きにしたのです。

本論 3. 御心を受け入れて

イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」（26:42）

この「第二の祈り」は「第一の祈り」から進展しています。原文を直訳すると「もし私がこの杯を飲むことなくしては過ぎ去らないのでしたら」となります（新共同：「**わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら**」）。主イエスは父の御旨を受け入れ始めている。

父なる神様はどのようにしてご自分の御旨を主イエスにお示しになっているのでしょうか。それは「沈黙」によってです。愛する我が子の祈りを痛いほど理解しながら「Yes」とはおっしゃらない。なぜか。ここで主イエスの願いを聞き入れ、十字架以外の方法に変更したならば、人類の罪が残ってしまうからです。誰一人罪から贖われなくなってしまう。主イエスが世に派遣されたのは、多くの人の罪を担って死ぬこと。それによって、私たちの罪に対する神の怒りが過ぎ去ることです。神はその方法を曲げることはできなかった。神が考え、定めた、唯一の「救い」の手段だったのです。そのためには愛してやまないひとり子イエスの願いをも ^{しりぞ} 斥けなくてはなりませんでした。

私たちはここに、神の中での激しい格闘を見なければなりません。父なる神様にとっても、この御旨を通すことはどんなにつらく苦しいことだったのでしょうか。では、なぜそこまでして主イエスを苦しめるのか。祈りを聞き給わないのか。それは、私たちを愛しているからではありませんか。私たちに永遠のいのちを与えるためならば、神様は手段を選ばなかったのです。父なる神様は冷たいお方ですか。いいえ、誰かが救われるためには誰かが犠牲にならなければならなかった。その犠牲となり得るのは、ただ一人、神の子イエス・キリストだけであつた。代役は誰にも務まらないのです。

イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかったのである。イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

(26:43-46)

これほどの祈りの格闘の中にあっても、弟子たちは主のために祈ることができませんでした。この経験は、後に弟子たちの心をどんなに苦しめたことでしょうか。私たちにも覚えがありませんか。「祈っています」と言いながら、十分に祈ってあげられなかったこと。最も自分の助けを必要としている人がいたときに、何もしてあげられなかったこと。弟子たちは眠っていた。肉体的にだけでなく、霊的に眠っていたのです。主イエスの苦しみの意味が何一つ分かっていませんでした。

「第三の祈り」の内容は書かれていません。主イエスはこの祈りを通して、ついに完全に父なる神様の御旨を受け入れました。もう一度弟子たちのところに来られたときの主の姿は、まことに堂々としています。「立て、行こう」と、^{かんぜん}敢然と十字架に向かって進み行こうとしておられる。主はたった一人で戦い抜き、ついに一睡もすることなく捕えられ、極度の疲労の中で法廷に立ち、^{せいさん}凄惨なリンチに遭い、ついには十字架につけられるのです。

【結論】

『パッション』などの映画では、ひたすら主イエスの肉体的苦痛に焦点が当てられています。それを知ることも時には大切でしょう。しかし、聖書読者はむしろ、その背後にある戦いの意味を理解しなくてはなりません。ゲツセマネの祈りは、父と子の格闘でした。そして、父は沈黙し、子は御旨を受け入れ、ついに両者は心を合わせてこの戦いに勝利を得るのです。沈黙に屈したわけではありません。主イエスは神の御旨を理解し、自分にしか贖いを全うすることができないという事実を受け入れたのです。この祈りの戦いを無に帰してはなりません。誰のための祈りだったのですか。それは私のため、あなたのためではありませんか。そして、主のために祈ることのできなかった残念な弟子たちのためです。私たちのすべての罪が赦されるため、主イエスが血みどろの戦いをしてくださったことを今一度心に留めたいと思います。

【祈り】

父なる神様。あなたは私たちを愛するあまりに、ひとり子イエスの祈りに沈黙をもってお応えになりました。この沈黙の裏側に、あなたのどれほどの苦悩があったことでしょうか。そして、主イエスも苦しみを通して、あなたの最善の御旨を受け入れ給うたのです。主イエスが敢然と進み行かれた十字架への道。それは私たちの罪のためでした。主の忍耐と痛みを覚え、私たちは神の愛に留まります。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

愛するひとり子の祈りに沈黙をもって応え、人類への愛を全うし給うた、父なる神の愛。御父の厳しき御旨を受け入れ、敢然と十字架へ向かい給うた、主イエス・キリストの恵み。

父と子によって示された愛を受け入れ、我らにも祈りを通して神の御旨に近づく道を歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。